

### 3. まとめ

塩嶺トンネル周辺の植生動態調査研究をはじめ、2ケ年を経過し、わずかながら植生動態の傾向がうかがえるようになってきている。また同時に、調査方法や調査区設定位置等に多少考慮を要する点があることも明らかになりつつある。

この2ケ年間の調査研究資料から明らかになった点をまとめると以下のようになる。

- 1) 永久方形区内の生育種の増減は、出現種数の少ない群落では少ないが、出現種数20種を超える群落では、増減がはげしい。
- 2) 春季相の調査結果は、その年の天候に大きく左右され、生育種の増減は、必ずしも群落の動態を意味していない。
- 3) 秋季相では、永久方形区内の生育種が全部、芽吹き、展開した後であり、群落の動態の把握により適当な時期である。これは恒存率と変化率との関係がほぼ一直線に並ぶことからうかがうことができる。
- 4) 人為植生であるアカマツやカラマツの造林地は生育種の絶対数と変動が大きく、また種の消長にかかわる要因が多様であり、群落動態の把握の対象として不適である。
- 5) 永久方形区内の種の増減の要因は多様であるが、地下水位あるいは水分条件の変動に限ってみた時、今のところ、水生植物（HH）の生活形をもつ植物の増減がもっとも高い相関々係を有しているといえる。

すなわち生活形スペクトルB群、C群およびD群がもっとも高い指標性を示すものと考えられる。